

翻譯考

玉置 韜 晃

誰れかも讀書は一種の創作のやうなものであるといつたが、私は常にさう考へてゐる一人である。もとより讀書は私の心境に或る刺激を與へるものであり、場合によつては全く私の心境を變革さすことさへある。ところで、讀書については自由に選擇がゆるされてゐる。こゝのところにはたしかに或る種の創作としての香が高いのだらうと思つてゐる。「自由の選擇がゆるされてゐる讀書」だからこそ、私の平生の教養と深い關係がむすぶれてゐるだらう。

とにかく、私は法律に關する著書に對して一向に興味をもたぬ。興味をもたぬために一向讀む氣にもならず、また、讀んでもわからない。同様に經濟に關する著書に對してそのとほりである。といつたやうなことを忌憚なくいへば、私の平生が「法律」とか「經濟」とかの著書から私自身を見出さうとしてゐないからである。このことは私にとつては悲しいことでもある。といつても、私の平生が讀書に對しての自由の選擇を私に與へてゐるのだから、なんともしてみやうがない。

「法律」「經濟」に關する著書の多くは、難澁な拙文だからといったやうな不屈な考へから讀まぬのではない。ひとへにそれは、私の平生がかやうな著書と縁遠いところからである。

さてまた、私の讀書には種々な型がある。先づ讀書に際して私は、その著書から私自身を讀み出さうとする。この場合にまた二つの型があつて、その一は、僭越にも全然著者の意見を無視してたゞ私自身をひたむきに見出さうとする型、その二は著者に對する私の平生の深い信仰から、無批判に著者の意見に隨順して、そのまゝ私自身を見出さずにはゐられない型とである。次に、著者の意見と私の意見とがチャンポンされて、私の平生に幾分の變革をおこす場合もある。また、私の平生とさう深い關係なしに、たとへば、試験でも受ける場合、古い歴史の事實を暗誦するために讀むとか、地理的な地名を覺えるために讀むとかといったやうな讀書もある。

かやうに私の讀書にはいろいろな型がある。このいろいろな型が、私の平生を作つてゆくのだらうといふことに異論をもつものではない。

そこで、かうした私の獨斷から私は「經論の翻譯」について異常な關心と興味とをもつてゐる。

二

由來、漢譯經論の研究については、幾多の難關がその前途に横つてゐる。ことに、その原典の手に入らないものに至つては、更に研究困難の程度を高めるものである。

譯經三藏が單に言語に曉通した學者であつて、譯出した成果に對して、温い信仰も深い理解もなく、たゞ單に忠實に言語の移し換へのみに努力したものであるならば、幸にその成果についての研究の困難が半減されるであらう。けれども、幸か不幸か、古來の譯經成果をあとづけてみると、譯經三藏の血のたるやうな翻譯功績には、單なる言語學者風の模寫ではなく、原經典に對しての深い理解と、敬虔な信仰とを織りこんでゐるものである。よつて、譯出成果を研究の資糧とする場合には、彼等譯經三藏の平生の教養に深い關心をもたねばならぬ。といふところに全く一種の創作の香が高い。またために、研究の對象としては、まことに厄介千萬なものである。

而も、古來の譯經三藏は實にその當時の學界に於ける權威者でもあつた。支那佛敎史上いくたびもくりかへされたことであるが、戰勝の第一賠償として、往々、譯經三藏の掠奪があつたといふ事實が、當時一般思想界に於ける彼等の權威を裏書きするものである。かくて、譯經三藏は單なる佛敎學者ではなく、當時の一般思想についても、勝れた理解と、深い造詣とをもつたものだと思つてよい。支那の『傳記』『目錄』に傳へられてた譯經三藏傳を見ると、この事實がはつきり窺はれる。

かやうな來歴をもつた譯經三藏の手によつてなされた成果は、單なる言語の模寫であり、移植であつたとして簡單にかたづけられるわけにはまらぬ。必ずや、その成果の上に、彼等の思想的背景が力強い影響を與へたものと信じてよい。ことに、譯經目錄中には、譯者の著述とながめて然るべき

ものでも、譯出經論として、その中におさめてゐるものも少くない。更に支那撰述の僞經問題などに至つては、ことにこの感を深めるものである。この意味に於て譯出經論の研究については、先づ一應、譯者の創作(?)として取扱ふべきではなからうか、若しさうだとすれば、そこに、譯者自身の思想系統とか、または譯者當時の時代思潮とかについて、充分の豫備知識をもたなければならぬことになる。

翻つて、印度の諸聖によつて創作された經論それ自體に於ても、その作者自身が、既に獨自の見解をもつて、佛意の發揮にとめたものであり、他の追隨をゆるさぬ嚴さをもつたものである。然るに、また更に、それらの經論が、譯經三藏の手によつて譯出された場合、譯者自身の思想的背景が色濃く、その成果の上に彩られるものだから、こゝに於て、譯出經論の研究には重ねたる意味に於ける困難のともなふものである。

三

今、その一例を『攝大乘論』の上にとつてみよう。本論はいふまでもなく無著の著であつて、その名の示すが如く大乘教義概觀ともいふべきものである。そして、印度大乘教學の研究には重要な資糧となるものである。ところが、どうしたものか日本では從來あまり研究されてゐない。それは多分、玄奘慈恩系の唯識學を繼承した日本唯識學では重に『成唯識論』の研究に没頭したために、

その間、自ら攝大乘論が等閑視されたものだらう。だから、日本では昔から僅に徳川時代の普寂によつて『攝論略疏』五卷の發表があるだけである。

さて、『攝大乘論』は大乗阿毘達磨經中の一章である攝大乘品を釋したものと傳へられてゐる。ところが、『大乗阿毘達磨經』はとうとう支那にも西藏にも翻譯されなかつたやうである。無論、印度に於ても現在傳はつてゐない。ところが、その斷片が『成唯識論』のうちに引用されてゐるばかりでなく、攝大乘論には多く引用されてゐる。即ち本論の十種の勝相の名稱などはまさしく本經のものであらう。本經と攝大乘論との關係についてはこの論文で詳論しようとするものではない。

ところで、攝大乘論には古來四代の譯がある。その一は北魏時代の佛陀扇多の譯出にかゝる二卷本と、その二は陳代の眞諦によつて譯された三卷本と、その三は隋朝の達磨笈多の釋論の譯出中の本論文と、その四は唐代の玄奘譯の三卷本とである。この四譯を對照してみると、多分、同本異譯だらうと思へる。ところが、その譯本の内容を綿密に比較對照してみると、四譯各々特徴をもつてゐるが思想的にいづつてもたしかにかなりの距離があるやうである。而も、譯本によつてのみ研究せねばならぬ攝大乘論に於て、各譯の間に思想的に距離のあることは困つたものである。さて、四譯中、扇多譯と眞諦譯とは同巧異曲であつて、ともに如來藏緣起論をもつてその眼目としてゐる。笈多譯も前二譯に近い思想をもつてゐる。然るに、玄奘譯に至つては、全く賴耶中心の緣起論であ

る。更にまた、世親の『攝大乘論釋論』にも三代の譯出があつた。即ち眞諦譯と、達磨笈多譯と、玄奘譯とである。三譯の成果は本論に於けるが如く、前二者は如來藏緣起論であり、後者は賴耶中心の緣起論である。

かやうに、各譯出本の上に於て、各譯者の意樂から思想的に距離を認めねばならぬことは、後學者にとつて厄介千萬な事實ではある。兎に角、この事實は譯者の意樂が根深くその成果に喰ひ入つてゐる證據だと考へてよからう。ところで、その成果の上に於て、本釋論の著者の意見と譯者の意見とが、どういふ風に識別さるゝかは大問題である。若し無著の意見が如來藏緣起論であるとすれば、玄奘譯は全く譯者の創作と見てよい、また賴耶中心の緣起が無著の眞意とすれば、眞諦譯は譯者の思想的背景がしかせしめたものであらう。いふまでもなく、無著の本論の眞意を窺ふためには、彼の著として傳へらるゝ本論以外のものを攻究すれば、その間に、或は、その眞意が明かになるかも知れぬ。然しそれらもまた、譯出經論であるために、攝大乘論の論釋と同様の疑問が残る筈である。

かやうな結果から見ると、譯出經論の上では、原著者の意見が、譯者の意樂によつて、程度の濃淡こそあれ、いかほどかが動かされたものだと思つてよい。極論すれば、この意味に於て、一般譯出經論は、譯者の創作としての豫想のもとに攻究せらるべきものでなからうか。

四

この一例としての攝大乘論は、私の意見の偏見をたすけんがためにことさらに拉へ來つたものではない、他の譯經論に於ても這般の消息が満たされてゐる。もつと適切な例を出せば、かの玄奘譯『成唯識論』十卷がそれである。本論の譯體には時間的取扱を全部無視して、かなり年代的に距離のある十大論師を、平面的に一線上にならべて、問答往復せしめてゐる。而もその内容に至つては護法思想を中心として、他の九大論師の意見を參酌し、それに組織を與へたものがある。それで、その譯體に於ても、糅譯てふ特種な譯體を見せてゐるもので、全く玄奘の創作として取扱ふべきものである。啻に玄奘のみならず、一般譯經三藏の多くは、爲法の念からではあるが、彼等の譯出が、やがて、創作的であることに自信をもち、誇りを感じたやうでもある。

だから、私は印度撰述の經論研究については、原本の有無にかゝはらず、その翻譯者の思想背景とか、彼等の平生の教養とかいつたことを、先づ解決した上のことにせねば決して周到な用意であるとはいへないと思ふ。(昭和十二年六月十日)